成田不動信仰と市川團十郎

――成田山旅宿の役割を中心に――

宮智麻里

〔抄　録〕

成田不動と歴代市川團十郎の関係は広く知られている。成田山新勝寺の初めての江戸出開帳の時に上演された『成田山分身不動』の最後に登場する初代市川團十郎とその息子九蔵が演じた不動明王に江戸の人々が惹きつけられたというのが定説である。しかし「流行神」が乱立し、開帳が頻繁に行われる江戸においては、それだけでは人々を惹きつけるのは難しかったはずである。

本稿は、元禄以降、江戸の成田不動信仰の拠点であった「成田山御旅宿」の経営にかかわっていた講中と市川團十郎の贔屓には居住地と職業に共通点があることに着目し、彼らが成田不動を信仰した理由を再検証するものである。彼らは度重なる火災を経験し、疫病により経済的損失を被るという点でも共通している。そこで、元禄十六年の出開帳のときに演じられた『成田山分身不動』を分析し、倶利伽羅龍王（剣）信仰が日本橋地区の「江戸っ子」商人たちを惹きつけた背景にあったことを検証する。

キーワード　成田不動、市川團十郎、成田山旅宿、出開帳、流行神

はじめに

成田山明王院神護新勝寺は千葉県成田市にある真言宗智山派の大本山である。初詣の参拝者数は明治神宮に次いで全国第二位を誇り、年間一千万人以上の参拝者を迎える東日本屈指の大寺院である。開山については平将門の乱の鎮圧をめぐる縁起が伝わる。成田山新勝寺の本尊の不動明王像と矜羯羅、制吒迦像は嵯峨天皇の勅名により弘法大師が自ら彫り、開眼したもので、高雄山神護寺の護摩堂の本尊として安置されていたものである。それを承平五年（九三五）、平将門の乱に際し、遍照寺の寛朝僧正が朱雀天皇の命により将門調伏の祈禱用に下総の地に持ち込んだものである。寛朝僧正は成田に像を安置し、護摩祈禱を行った。その満願の日に将門は討死したが、いざ像を京都に持

ち帰ろうとしても像は微動だにせず、そのまま伽藍を建立して成田山明王院神護新勝寺として東国鎮護の霊場とした。

将門調伏の縁起譚は元禄十三年（一七〇〇）の『成田山神護新勝寺本尊来由記』以降多数出版され、広く流布した。また元禄十六年（一七〇三）に江戸深川で出開帳が行われ、それに合わせて初代市川團十郎（以下「初代」「二代目」など代数を表記）はその信仰を示すべく『成田山分身不動』を演じ、江戸での成田不動信仰の拡大に大きく貢献した。以降歴代團十郎は成田不動への帰依を明言している。

これまで江戸時代の成田不動信仰については、多くの研究がなされてきた。成田山新勝寺成田山新勝寺の出開帳については小倉博[1]や原淳一郎[2]、歴代團十郎の成田不動信仰については西山松之助[3]、旭寿山[4]、木村涼[5]、成田山の寺院経営については西山松之助[6]の研究がある。この他に出開帳の背景にある幕府の政策意図[7]、出開帳の開催場所[8]、また出開帳全般の研究としては金山正好[9]や比留間尚[10]のものがある。成田山新勝寺以外の出開帳の個別の事例として嵯峨清涼寺[11]、信州善光寺[12]、身延山久遠寺[13]、さらに宗派別では一番多かった日蓮宗についての研究[14]がある。

團十郎については夥しい数の研究や評論が出版されており、一部は『市川團十郎研究文献集成[15]』や『資料集成二世市川團十郎』にまとめられている。また七代目が制定した「歌舞伎十八番」のうち、特に不動信仰や江戸文化の形成と深いかかわりを持つとされる『勧進帳』や『助六』などの演目についてもそれぞれ研究がなされている[16]。

しかし、これまでの研究では成田不動の何が江戸町民を惹きつけたのか、それがどう團十郎と結びついているのかの考察が十分とは言えない。元禄期以降の江戸では流行神[17]と呼ばれる、霊験を強調し一時的に熱狂的な信仰を集める神仏や地方の有名寺院の出開帳が相次ぎ、庶民の信仰の対象は半ば娯楽化し、目まぐるしく変化していた。そうした環境の中で、團十郎の人気にいわば便乗する形で流行神のように登場した成田不動が、多くの流行神や出開帳を行う地方寺院とは異なり、江戸での信仰を定着化させるのに成功したのはなぜなのか。元禄十六年の出開帳直後に江戸に設置された成田山御旅宿（以下「旅宿」）と呼ばれる簡易配札所の運営に深く関与していたとされる講中と團十郎の贔屓筋の類似性に着目し、その理由を検証する。

なお、深川地区は大正十二年（一九二三）九月一日の関東大震災と昭和二十年（一九四五）三月十日の東京大空襲と二度に渡り町全体が焦土と化したために、深川不動堂が所有していた文書類はほとんどが焼失した。現存しているのは成田山で保管をしていた一部の文書のみであり、旅宿のあった場所や運営方法など多くのことが不明である。そのため江戸中期以降書かれた日記、随筆、小説、歌舞伎の脚本や評論、新聞記事などを用いてその証左とする。

一、江戸の信仰状況

成田山新勝寺が江戸深川において出開帳をするに至った背景には、湯浅隆らが指摘するように幕府の寺院経営の体制的保証の方針転換がある[18]。幕府は従来、堂舎の再建や修復に対しては檀家の負担とし、普請方の派遣、被下金、拝借金、木材の下賜という形で助成を行ってきた。しかし、大規模寺院で地元の檀家などだけではその費用を賄えな

い場合、あるいは檀家を持たない祈禱寺の場合には、勧化御免、開帳の差免、富突御免という形での募金を許可した。江戸における開帳は承応三年（一六五四）から行われているが、幕府が寺社経営の自立化を目指した頃から江戸市中での開帳が増加を始める。限定領域内を巡行する勧化に対し、開帳は大都市の一か所で多くの参詣者を獲得し、多額の集金が可能であったため、元禄の頃には一大ブームと言える状態となった。

過当競争状態にある江戸市中の開帳では、民衆と仏の結縁という宗教的側面こそがその成功の可否を決した。そのために幕府は元禄七年、「御府内之儀、宗旨思寄之儀二有之候」[19]として、府内という限定された地域内で個人の意思による信仰の選択を可能にした。その上で、出開帳を一季五件に制限し、寺社の収入を確保しながら宗教活動を統制しようとした。それでも開帳は人気を博し、江戸時代を通じて、江戸市中で千五百回を上回る開帳が記録されている。

平山敏治郎は、「もともと神は祭るときに出現し、もしくは出現したときに祭るものと信じられていた」とし、その信仰の形が秘仏の信仰に結びついたとする。[20]その上で開帳と神祇信仰の祭りとの類似性を指摘している。神を祭ることは村などの共同体単位で行われてきた行為である。江戸の町人の生活は消費活動の上に成り立っており、農村部の生産活動を中心とする生活様式とは異なる。共同体全体が一年を通じて同時期に同じ様な労働をし、休み、祭りなどを行い、天候や農作物の出来など祈禱内容を共有していた農村部とは違い、江戸の人々は各人で社会と対峙せねばならなかった。そのため神仏は、個人化し、多様化した祈禱内容に応じてその霊験を特化させた。寺社は縁日を定め、開帳を行い、人々は自分の祈禱に合う神仏を選択して拝んだ。信者側の要求だけではなく、檀家を多く持たない寺や祈禱寺などの経営状態も霊験を強調する大きな要因であった。寛政十二年（一八〇〇）に出版された『江戸神仏願懸重宝記』[21]には、頭痛、百日咳、脚気、虫歯などの疾病関連と、盗賊除け、夫婦仲などの災難除けなど細分化した祈願内容が挙げられている。こうした高度に機能化した神仏は江戸後期になると短期的に爆発的な人気を集める「流行神」として頻繁に登場するようになる。この他に八日薬師、十三日日蓮、十五日阿弥陀、妙見、十八日観音、二十一日弘法大師、二十四日地蔵、天神二十五日、二十八日不動、子日大黒、寅日毘沙門、巳日弁天と連日のように縁日が立った。斎藤月岑の『東都歳時記』に「其外境内神仏の会日等は繁多にして勝計に遑あらず。故に其偉なるものを抜萃して瑣細の行事はこゝに略」[22]と記されるほど、開帳や縁日は一年を通じて無数に行われていたのである。

神仏が乱立状態の江戸で、民衆を惹き付けるものとして活用されたのが霊験である。寺社のみならず、諸藩も自国の寺院の神仏を江戸に勧請しその利益を宣伝した。現在の東京でも広く信仰を集めている丸亀藩の金毘羅社、久留米藩の水天宮、三河西大平藩の豊川稲荷などはいずれも藩邸内に設置され、江戸庶民の信仰を集め、藩に多くの収益をもたらした。これに対し、上総久留里藩の黄金不動のように藩が霊験譚を流布した後に開帳したが、そのあからさまなやり方に寺社奉行から処分を受けた事例もあった。[23]林屋辰三郎は開帳の流行について

「その実は勧化のための手段となり、信仰行事の体裁さえ失うに至った」[24]と指摘しているが、むしろ民衆が自由意思で信仰を選択することが可能になったために寺社側が霊験を特化させ、参詣者は神仏の機能を求めて市中を移動するという極めて「江戸的」な行為が開帳数の爆発的増加を招いたと言えよう。

どれだけ世俗化、娯楽化しているように見えようとも開帳の成否は民衆の信仰の有無にあった。成田山新勝寺が最初に出開帳を行った元禄十六年には、江戸で居開帳は十三件、出開帳は十件行われていた。たとえ幕府が公認する出開帳であったとしても、無名の一地方寺院であった成田山新勝寺が出開帳を成功させ、その後も信仰を維持させるためには、他の神仏との過酷な競争を勝ち抜き、江戸の人々を魅了し、他の寺社との差別化が可能な特定の霊験が必要であったはずである。

二、成田山新勝寺の江戸出開帳

元禄十六年（一七〇三）四月二十七日から六月二十七日までの成田山新勝寺初の江戸出開帳が深川の富岡八幡宮別当永代寺の境内で行われた。元禄十四年（一七〇一）に完成した本堂建立にかかった五百両の借財の返済が目的である。これに合わせ四月二十一日から七月十三日まで森田座で初代が演じた『成田山分身不動』が呼び水となり、出開帳には多くの参詣人が集まり、六十一日間で「都合金弐千百弐拾両[25]」もの収入を成田山にもたらした。

深川での出開帳は、江戸の信者が地元での参拝を望んだためとされている。しかし、実際には同時期の記録である『世間咄覚書』に

深川にて開帳仕候不動、成田之不動之由。田賀之釈迦以来之不動にて、作之不動之由。新田之不動と同じ時分に開帳仕、最前は是も参無之、すでにもはや仕間敷と存候処に、不思議なる事ども有之候ゆへ、それから参殊外沢山に有之候故、金子三千両ほど集め申候由。はいでんもどこも米計をつみ置申候由[26]

とあることから、当初新勝寺の知名度は低く、「すでにもはや仕間敷と存候」というほど人気がなかったことが伺える[27]。

その成田不動が極めて短期間に参詣者を増加させたのは、この次項に描かれる「不思議な事ども」と、初代の芝居の成功に依るところが大きかった。

集客さえできるようになれば、成田不動には江戸の人々を惹きつける大きな要素があった。すなわち平将門にまつわる縁起である。そもそも江戸の人にとって将門とは神田明神に祀られる御霊で、畏怖しながらも尊崇の対象であった。成田不動はその将門の調伏祈禱に用いられたほどの強い霊験を持つのである。この霊験こそが江戸の人々が成田不動に惹きつけられた理由のひとつである。

成田山新勝寺に伝来する最古の縁起である『当山不動明王縁起』には「天文三年五月二十八日」と巻末に記載があり、その縁起を寛正二年（一四六一）の「天下疾疫激発」にもとめている。これに対し、将門の乱に由来する縁起は寛文十年（一六七〇）成立の『成田山略縁起』まで登場しない。村上重良は「この縁起はもともと別系統のものであったろうと思われる[28]」と結論づけている。しかし、鶴岡静夫は

『利根川図志』を分析し、利根川流域には将門調伏の祈禱に関係する縁起を持つ真言宗寺院が多いこと、それが時代を経て広く宣伝されるようになったことを指摘する。[29] 成田山縁起の変化は「別系統」というよりも、将門調伏の祈禱の力が「後世になってから実際以上に誇張されるようになってきた」[30]とする鶴岡の説と合致する変化が生じたためであろう。

三、初代市川團十郎と成田不動信仰

では初代市川團十郎とはいったい何者だったのであろうか。成田山新勝寺と初代との関係は以下のように伝えられている。

初代は「荒事」で人気を博するが子どもに恵まれなかった。そのため成田山新勝寺の本堂（現在は薬師堂）で祈願し、息子九蔵をもうけた。成田不動に感謝し、元禄十年（一六九七）には中村座で不動明王を主題とした『兵根元曽我』を演じ大成功をおさめた。さらに元禄十四年（一七〇一）『出世隅田川』、十五年（一七〇二）には『勧進帳』を上演し、不動の姿に扮している。元禄十六年（一七〇三）に上演した『成田山分身不動』では、「扨も、関東下総の国成田山不動尊霊験あらたに候よし。参詣致さばやと存じ候」と初めて成田山不動に限定した台詞を取り込んだ。

寺社の開帳に合わせた演目の興行は、延宝八年（一六八〇）以来、主に大阪で行われていた。初代も貞享二年（一六八五）三月に江戸の市村座で『魚籃開帳金平道心』に金平役で出演し、大当りを記録している。[31] 開帳の中心が江戸に移行するにつれ、江戸でも頻繁に開帳芝居は上演されるようになった。（表1）比留間によれば[32]貞享二年（一六八五）から慶応三年（一八六七）の間に開帳に合わせての上演は五十一例にものぼる。この数字は「江戸へ出て役者を頼む神仏[33]」と川柳に読まれたほど芝居が開帳の宣伝として有効な手段だったことを証明するものである。

表1[34]

年	芝居小屋	演目
延宝八	松嶋半彌座	須磨寺の開帳
貞享二	市村座	魚籃開帳金平道心
元禄四	大阪角芝居	堺大寺開帳
元禄六	京都万太夫座	仏母摩耶山開帳
	岩井半四郎座	仏母摩耶山開帳
元禄七		さい寺の開帳
	京都村山平右衛門座	阿闍世太子倭姿
元禄八	京都早雲長太夫座	けいせい阿波のなると
	大阪	演目不明
元禄九	嵐三右衛門座	熊野山開帳
元禄十	嵐座	東福寺の開帳
元禄十一	京都	けいせい浅間獄
		傾城江戸桜
元禄十二	岩井半四郎座	大山寺薬師の開帳
	京都	けいせい仏の原
元禄十三	竹嶋座	利生物語
元禄十四	市村座	傾城乳母桜
	岩井半四郎座	河州道明寺開帳
元禄十五		けいせい壬生大念仏
元禄十六	森田座	成田山分身不動
	森田座	小栗十二段
	岩井半四郎座	宝寺開帳
		傾城三つの車

初代は延宝元年（一六七三）の『四天王稚立』で「荒事」と呼ばれる芸を創始したと言われる。しかし、初代が「荒事」を「創始」したというわけではない。延宝元年以前にも「荒武者事」という演技パターンが成立していたが、狂言の最後に「荒（現）人神の分身となって

立ち現れる、いわゆる「神霊事」の演出を伴っていた[35]」ことがそれ以前の演技手法とは異なっていたのだろうと服部幸雄は指摘している。町人は武家地作成のために移住を強いられ、明暦の大火では火災の犠牲になるだけでなく、支援の手が届かなかったために多くが凍死した。しかし、江戸の町人経済は武家社会の消費活動に依存していたため、町人は武家社会を批判することはできなかった。初代が提示した、主人公が邪悪な権力者に立ち向かうために神仏の加護によって超人的な力を獲得し、不当な扱いを受ける正義の弱者のために闘う芝居は江戸の町人を惹きつけた。

初代は貞享年間（一六八四-八八）にはすでに「お江戸におゐてかたをならぶるものあらじ。（中略）およそこの人ほど出世なさるる芸者、異国本朝に又と有るまじ。…おそらくは末代のやくしやのかがみとも成べき人なり[36]」と称される江戸随一の役者であった。しかし、元禄の初めには給金が高額になりすぎたために役がつかず、また芝居の評判が悪く打ち切りになり、たびたび病気で休演するなど不遇の時代が続く。元禄九年（一六九六）には死亡説まで流布する始末であった。そうした状況を受けて人気の凋落に怯える心情を元禄六年（一六九三）と九年に願文に書き残している[37]。元禄六年の願文の中で、初代は「役者中間のずい一」と呼ばれ、給金二百五十両を取るようになったのは、「是なん自力のはたらきなるべからず。忝も神りよの方便によって」であると述べ、信仰する神仏を列記している。ここで挙げられるのは、「いわゆる三宝荒神、元三大師、大日　不動、愛染明王、実に日天は照玉へ」であり、九年には、「諸仏神の御影、一偏に大日日輪、観世音、千住、せんげんの御りしやう、延命、愛宕、即荒神、大小不動の御ちかひ」となる。不動に対する信仰については六年の願文の中で、

不動明王幷に二童子、右三年が中、信心おこたらず。月の廿八日には猶禮拝深く、別而三年が間、月に一ふりづゝ捧る所の木太刀、年に一度の以代参、即大山不動明王江是を奉納事

だと記している。特筆すべきは不動を「即大山不動明王」としている点である[38]。通説では初代は二代目の誕生を祈願してから成田不動の熱心な信者であったということになっているが、願文には成田不動についての言及はなく、加賀佳子も指摘するように後に言われるような熱心な信者であったとは考えにくい。

さらに、京都にいた元禄七年（一六九四）、妻が妊娠した際にも

清水観世音へ其十七日より廿三日まで鹽立し、水ごりをとつて参詣いたし、何とぞ父母いきがいの間、なげきをかけ不申、順死往生のねがひ、あやまたせ玉ふな、

とここでも成田不動に触れていない。妻の妊娠の報を受けて成田不動についてまったく言及しないという事実も、初代が後に宣伝されるようには成田不動を信仰していなかったという議論を補強するものである。

この元禄九年（一六九六）の願文を書いた翌年五月の『兵根元曽我』は團十郎にとって久々の大当りであった。舞台には息子の九蔵演じる不動明王が登場した。台本では「不動」は「不動明王」としか記されておらず[39]、これが成田不動という特定の不動を演じたものだったのか、あるいは江戸の人々が成田の不動だと理解していたかは疑問が残る。また成田近郊から信者が見物に訪れ、賽銭が毎日十貫文目にもものぼり、初代は舞台終了後、二代目と共に成田山に神鏡と幕を納め、五百文を寄進したとされるが、成田山の記録に神鏡があるのは元禄十年（一六九七）ではなく十六年であり、團十郎親子が神鏡を奉納したのは元禄十六年（一七〇三）であった可能性がある[40]。

初代が不動を演じた理由を成田不動に祈願して九蔵を得たことで信仰を深めたことに求めるのは、成田山側と市川宗家やほとんどの研究者の見解である。しかし、願文に成田山を信仰していた形跡がなく、さらには『兵根元曽我』で「成田不動」だと明言していない。また團十郎と成田不動を結びつける記述は、四代目の時代に発行された宝暦四年（一七五四）の『顔見世役者のくさめ』に「惣役者の氏神成田の不動の一番むすこ」とあるのが最も古く、二代目が成田不動への祈念によって生まれたという話も宝暦九年（一七五九）の『役者談合膝』に

> 言度々也。

とあるのが初見である[41]。これらのことから、元禄十年（一六九七）ないし十六年（一七〇三）成田山に数々の寄進をし、歌舞伎役者としては初めて「成田屋」という屋号を採用したのは、二代目の誕生に対する謝意のためではなく、舞台の成功を成田不動の加護であると考えたからであると推測される。

元禄十年十一月に中村座で初代は『小栗』の中で再び不動明王を演じているが、これは不評で数日で打ち切りとなった。しかし翌元禄十一年（一六九八）三月の『関東小禄』では大当りをとり、十二年（一六九九）に出版された『役者口三味線』では「立役　上々」に列せられ、五月の『葛城小夜嵐』、次いで七月の『一心五界玉』、十一月の『当世阿国歌舞伎』で大当たりを記録している。その後も十三年（一七〇〇）の『役者談合衝』、十四年（一七〇一）の『役者略請状』でも「立役　上々吉」に列せられた。「役者の随一」と言われ、人気役者ではあったものの、京都では「藤十郎存生の内は、京へ役者登すまじといへりと也[42]」というほどの藤十郎との実力の差を感じ、「敵役」としてしか評価されてこなかった初代の役者としての運気は、元禄十年の『兵根元曽我』以降上向いた。元禄十四年（一七〇一）には『出世隅田川』で藁人形の不動が奇瑞を示すという役を演じた後、給金は四十二歳にして八百両を超え、六十余歳で五百両だった藤十郎を大きく引き離した。翌十五年（一七〇二）には不動の型を取り入れた『勧進帳』を上演している。初代にとって不動役は運を呼び込むものであ

> され共此技藝を譲るべき一子なくして、多年念ンじ奉る成田山新勝寺不動尊をいのりて、栢莚を儲たり。父子明王のれいげん有がたき事を思ひ、依之才牛栢莚一代に綺語ながら不動の尊像に成狂

ったのである。そして出開帳の宣伝のために演じた『成田山分身不動』は大きな成功を収め、初代は江戸の人々に成田不動の霊験を知らしめるのに大きな貢献をした。初代の芝居だけが成田信仰定着の理由であれば、例えば西大寺愛染明王の出開帳の際の『矢の根』でも同じような信仰を江戸にもたらしたはずである。しかし、西大寺愛染明王の信仰は江戸には定着しなかった。初代の信仰が成田信仰を広めるために重要だったのではなく、あくまでも江戸の人々が芝居の中に成田不動の特定の要素を発見し、それを維持するためのメカニズムを構築したとみるべきであろう。一方で、團十郎親子にとって重要だったのは、この芝居により江戸の富裕商人の後ろ盾を得たことであった。成田不動と富裕商人との結びつきによって、「市川團十郎」という名跡は江戸歌舞伎の中で特別な位置を占めるようになっていくのである。しかし、初出開帳当時の成田不動の人気は、霊験譚と芝居の人気に支えられた「流行神」的性質のものであり、江戸における信仰が持続できるかは未知数であった。

四、『成田山分身不動』の中の倶利伽羅信仰

ここで成田山出開帳成功のきっかけとなった『成田山分身不動』の内容についてみてみたい。

『成田山分身不動』は小町物や隅田川物、「鳴神」など他の演目のモチーフをつなぎ合わせ、最後に成田不動が登場するという構成になっている。『鳴神』は貞享元年に『門松四天王』の一部として上演されており、また不動が元禄八年以降複数回演じられていたことは前述の通りである。このいずれでも不動信仰が興隆した形跡はない。では『成田山分身不動』は何が違ったのであろうか。

『成田山分身不動』は言うまでもなく、成田山新勝寺の江戸出開帳を宣伝する芝居である。これまでの研究では、もっぱら最後の場面に登場する初代と二代目が扮した不動が人々の信仰を喚起したと言われおり、倶利伽羅（倶利伽羅龍王と倶利伽羅龍剣を合わせて「倶利伽羅」とする）信仰については論じられてこなかった。

倶利伽羅に関するものとして、まず「鳴神」の物語が登場する。ここでは鳴神上人は大伴黒主、また雲の絶間姫は小野小町という設定に変えられている。黒主が龍神を洞窟に閉じ込め降雨を抑さえたため、黒主を小野小町が誘惑し、洞窟の注連縄を切り、龍を解放して雨を降らせるというおなじみの内容である。さらに四段目で黒主は道誉上人として登場し、最後には利剣で自ら命を絶つ。その後、最後に黒主が胎蔵界の不動明王であることが明かされる。

日本には古来から蛇を水神とする信仰があった。仏教の伝来以降、雨乞いは仏教儀礼によって行われるようになり、蛇神信仰は経典にあらわれる龍王と結びついた。密教の請雨法では祈願の対象は龍王であるため、水神の中でも雨に纏わるものは龍王にほぼ限定されている。平安期に始まった雨の神としての龍王・龍神信仰は、近世になりますます活発になった。「鳴神」に登場する滝から数々の龍が天に昇り、雨を降らせる話は、こうした信仰が広く受け入れられていたからこそ成立するものである。[43]

倶利伽羅に関する記述は、弘法大師空海が請来した次の経典の中に

表れる。『金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品』、『底哩三昧耶不動尊威怒王使者念誦法』、『不動使者陀羅尼秘密法』、『勝軍不動明王四十八使者秘密成就儀軌』、『倶力迦羅龍王儀軌』[44]、によれば不動明王は大日如来の化身であると同時に、倶利伽羅龍でもあることが記され、大日如来と不動明王を同一尊格とする説がすでに平安期には日本に伝来していたことがわかる。また『佛説倶利伽羅大龍勝外道伏陀羅尼經』[45]では、不動明王は九十五の外道と戦うために剣に変じ、外道も剣に変じたため、不動明王は倶利伽羅大龍となり、外道を屈服せしめたとある。また、唯一倶利伽羅龍剣の形状を記す『説矩里迦龍王像法』[46]においては、龍が剣に纏わりつき、外道が変じた剣先を飲み込もうとしている姿であるとされる。また倶利伽羅大龍に念ずれば雲を起こし、雨を降らせ、病人を治すとある。

また後の不動信仰に影響を与えた淳裕（寛平二年八九〇–天暦七年九五三）が著わした『要尊道場観』[47]の「不動尊道場観」の十九観の第十八にも倶利伽羅が剣を繞るとある。さらに江戸期に特徴的な仏教教説を列挙した三田村鳶魚の『近世佛教集説』[48]には「不動尊愚抄」なる書が含まれており、この中でも「倶利伽羅大龍之事」として、不動が利剣、さらに倶利伽羅大龍へと変化することが記されている。

龍神が雨と結びついていることは、五段目に登場する弘法大師の記した「龍」という文字についての説明からも確認することができる。黒主は成田不動である。その黒主が龍神を洞窟に閉じ込めることが可能なのは、彼が雨を呼ぶ倶利伽羅龍王だからである。元禄十六年当時の演出がどんなものであったか知るのは難しいが、「鳴神」のクライマックスで龍神が逃げたことを知り、怒り狂う鳴神上人は柱に手足を巻き付ける「柱巻の見得」を行う。これは倶利伽羅大龍が利剣に巻き付く姿を模したものであろう。

道誉上人に扮した黒主の最期は、「爰に不動尊御立ちゐる。此利剣にて貫ぬかん」と忽ち捨身」とある。道誉は天文年間（一五三二–五四）に活躍した僧である。言葉につまってうまく説法ができないため成田不動に願をかけ、満願の日に不動明王に利剣を呑むように言われる。道誉はそれに従い利剣を呑み、大量の血を吐き悶絶し気を失うが、目が覚めたときには弁舌滑らかになっていたと享保七年（一七二二）の『佐倉風土記』に伝えられる。後にこの時の衣は「鈍血の衣」として開帳の際には展示されるようになる。同じ話は祐天にも伝わる[49]。道誉は下総の小弓の浄土宗大厳寺を開山し、増上寺九世法主となった。祐天も大厳寺の住職を経て、増上寺大三十六世法主という共通点がある。

『成田分身不動』に描かれた黒主は、龍をあやつる倶利伽羅龍王であり、利剣を呑む倶利伽羅大龍でもあり、かつ成田不動なのである。それを当代一の人気役者で、「荒事」の初代が演じた。修験道では不動明王を本尊とし、修験者は不動との一体化により験力を獲得すると信じられていたが[50]、初代はそれを舞台上で鮮やかに体現したのである。このことから、江戸の人々が初代の芝居に魅了されたのは、将門を調伏するほどの霊力を持つ成田不動が倶利伽羅と結びついたためであったためだと推論される。

明和元年（一七六四）の巡行開帳の宝物の中には「宝劔」があり[51]、

本尊と並んで「天国宝剣」が人々の信仰を集めたことが伺える。『成田山分身不動』の内容から考えて、元禄十六年の江戸出開帳においても「天国宝剣」が宝物として出開帳を飾ったと考えるのが自然である。

『成田山分身不動』の黒主が利剣を呑んで息絶える設定だったのかは不明であるが、それが不動尊像だけでなく、利剣を想起させる「天國の宝剣」を宣伝する目的であったのは明らかであろう。文化三年（一八〇六）の出開帳の目録には「鈍血の衣」が加わっていることが確認できる。[52] さらに文政四年（一八二一）の出開帳の際には、七代目團十郎は『伊達模様（ネに衣）解脱絹川』で祐天を想起させる「祐念」と成田不動、その他四役を演じている。[53] そして成田不動の命により祐念が利剣を呑む話が展開する。祐天は鬼怒川のほとりで江戸三大幽霊の一人、累の霊を解脱させた顛末を記した『死霊解脱物語』で江戸庶民の人気を得ており、外題に「解脱」「絹川」の文字が並べば、これが祐天と関連した物語であることは誰の目にも明らかであった。[54] つまり、この芝居は、道誉・祐天の利剣譚を通じて七代目が倶利伽羅大龍であり成田不動であることを示しており、祐天の人気を借りて「鈍血の衣」を宣伝するものなのである。同じモチーフは文政六年（一八二三）の『法懸松成田利剣』にも登場する。次いで嘉永四、五年（一八五一―二）に八代目が大病を患ったときの瓦版は祐天の利剣譚を引き合いに出し、八代目が大量に吐血して意識不明になるが、弟子が髪をおろし、蔵前の旅宿に願かけをすると八代目が回復したと成田不動の利益を称えている。[55]

なお、現在でも成田山新勝寺や深川不動のみならず全国の別院や末寺で無病息災、身体健全のための「天国宝剣加持」が行われていることからも成田不動信仰における利剣の役割は大きかったと言えるだろう。

五、旅宿と「江戸っ子」

成田不動の出開帳は成功の裡に終了したが、それと前後して六月には鉄砲洲船松町に分霊である「成田山旅宿」が祀られた。その後、旅宿は寛政二年（一七九〇）には坂本町壱丁目の正福院に移転したが、翌三年（一七九一）に寺社奉行牧野備前守より「町方に僧侶の住居不相成趣厳重の御触」が出されたために日本橋南茅場町の薬師境内に移転し、[56] その後、日本橋、浅草界隈を移動したことが知られている。『新修成田山史』では深川に置かれていた時期が一番長いと考えられているとしているが、[57] 表2にまとめたとおり、ほとんどの期間は日本橋、浅草近辺に設置されていたとみるべきであろう。この旅宿の存在こそが成田不動信仰を江戸に定着させる上で重要であった。

旅宿運営に関わっていたと考えられる内陣五講と内陣十六講は日本橋の魚河岸と深川の米問屋、材木問屋、青物問屋が中心であるのに対し、浅草十講は蔵前の札差を中心とし、それに芸能界、花柳界、鳶職が加わったものである。[58]

日本橋の魚河岸は慶長元年（一五九六）に小田原町に市場を開設してから、本船町へと拡大し、寛永十七年（一六四〇）には問屋営業が認められた。魚河岸には幕府に納魚の義務が課せられる代わりに公租公課が免除され、御用魚は別格の扱いで、その運搬には百万石の大名

表2

年	旅宿設置場所	管理講中
元禄十六	鉄砲洲船松町	内陣各講
寛政二	坂本町壱丁目正福院	内陣各講
寛政三	南茅場町薬師境内	内陣各講
天保五	永代寺長寿院（三カ月）	内陣各講
不明	坂本町壱丁目正福院	内陣各講
不明	南茅場町	内陣各講
天保十二	浅草蔵前八幡町大護院境内	内陣各講
文久二	坂本町壱丁目正福院	浅草十講
慶応三	浅草蔵前八幡	浅草十講
明治元	浅草八軒町仙蔵寺	浅草十講
明治二	三月浅草新町清光院境内観音堂	浅草十講
	五月浅草八軒町仙蔵寺	浅草十講
	六月八軒町仙蔵寺	浅草十講
	九月三十日永代寺吉祥院聖天堂	浅草十講

行列を横切ることが許されていた。[59] また鯉問屋は江戸城で必要な鯉が不足した場合には町人宅の池から勝手に鯉を調達する権限が与えられていた。江戸にある問屋や商店の多くが出身地域を宣伝していたのに対し、江戸根生（ねおい）であることを誇る魚河岸だけは独自の流通ルートを確保し、「幕府御上納」として格別の特権を与えられていた。

江戸の米問屋および仲買があったのは、「米河岸」と呼ばれた本船町、伊勢町、小網町、小舟町、堀江町である。享保十五年（一七三〇）に八人、寛政六年（一七九四）にさらに六人が問屋として指定された特権的商人である。また青物問屋は、江戸市中に点在していたが、貞享三年（一六八六）には神田多町、連雀町、永富町にまとめられ、正徳四年（一七一四）に幕府から青物御用を命じられた。享保十年（一七二五）には問屋は九十四件になっていたという。[60] 魚河岸と同様、これらの商人に共通するのは江戸根生であることを誇り、江戸城の台所を預かっているという特権意識である。それこそが後の「江戸っ子」の選民意識と他国者に対する絶対的な優越感の核となった。このことは歴代團十郎のあり方に大きく影響していく。

延宝年間に芝居小屋は中村座、市村座、森田座、山村座の四座となったが、堺町の中村座と葺屋町の市村座は通りを挟んで建っていた。明暦の大火以前に吉原遊郭があったのは堺町、葺屋町の隣接地域である。

天正十八年（一五九〇）に江戸の市街地の整備が始まり、慶長九年（一六〇四）に資材調達のため材木商が神田、日本橋、本八丁堀界隈に居住させられた。その後、寛永十八年（一六四一）の大火により幕府用資材が焼失したため、神田佐久間町、神田久右衛門町、日本橋本材木町、三十間堀、本八丁堀など周辺三十五カ町の材木屋、薪炭屋が深川佐賀町に移転させられたが、元禄十二年（一六九九）に御用地として吸収されたため、代替地として深川築地が与えられた。

札差株仲間が認許されたのは享保九年（一七二四）である。これにより札差が旗本・御家人の金融を独占するようになった。株仲間の百九人は浅草蔵前近辺に居住した。旅宿の本尊は、浅草札差の青地四郎左衛門が奉納したものだと言われている。

以上のように、札差以外の講中は、現在の神田から日本橋にかけての極めて限定された地域に集中していた。旅宿の置かれた地域が内陣五・十六講と浅草十講の活動地域と重なっていることは、江戸の成田不動信仰における彼らの威勢を証明するものである。

「朝昼晩三千両のおちどころ」とは日本橋の繁栄を示す言葉である。朝は魚河岸、昼は芝居小屋、夜は吉原でそれぞれ千両が動くという意

味である。吉原の繁昌を支えたのは、蔵前の札差、日本橋魚河岸、神田青物市場、木場などの旦那衆であった。旅宿運営に関わった講中は江戸経済・文化の中心的存在だったといえよう。

では、旅宿の運営に関わった「江戸っ子」とは誰なのであろうか。山東京伝は天明七年（一七八七）の『通言総籬』の中で、以下のように記している。

金の魚虎をにらんで、水道の水を産湯に浴て、御膝元に生まれ出ては、拝搗の米を喰て、乳母日傘にて長、金銀の細螺はじきに、陸奥山も卑とし、吉原本多の髣筆の間に、安房上総も近しとす。隅水の鮑も中落を喰ず、本町の角屋敷をなげて大門を打は、人の心の花にぞありける。江戸っ子の根性骨、万事に渡る日本ばしの真中から、ふりさけみれば神風や、伊勢町の新道に奉公人口入所といふ簡板のすぢむこふ、（後略）[61]

これは明らかに日本橋の富商を念頭に入れた記述である。西山松之助は江戸期の文献に表れる「江戸っ子」を分析したうえで、その五つの条件として、㈠江戸城徳川将軍家のおひざもとの生まれ、㈡宵越しの金をつかわない、㈢乳母日傘で成人し、洗練された高級の町人で、㈣しかも国初以来生えぬきの日本橋本町の生まれで、㈤市川團十郎をひいきにする「いき」と「はり」とに男をみがく、生きのいい人間だと結論づけているが[62]、これもまた日本橋地区の大店の旦那衆を指している。日本橋地区に集住していた富商と札差は、幕府との特別な関係によって商売上の特権を有していた。そのことが「徳川将軍家のおひざもと」意識につながった。彼らは、伊勢や近江など他国から江戸に進出してきている江戸店とそこで働く人々が持ち込む文化に対抗し、自らを差別化することで江戸独自の町人文化を牽引したのである。この江戸根生の商人すなわち江戸っ子が贔屓にしたのが市川團十郎であった。

初代が活躍した時代は「生類憐みの令」と呼ばれる一連の触が出された時代であり、これが人々の負担となったことはよく知られるところである。法令の制限は生活のあらゆる局面に及んだが食料供給の点では配慮がされており、例えば個人の釣が制限されたのに対し、漁師の活動については制限されなかった。しかし、蓄養売買、鰻や泥鰌の売買は禁止された。冷蔵技術が発達していない時代、魚問屋は鮮魚を生け簀で管理したため、蓄養売買禁止令に抵触することになった。また、幕府財政の悪化に伴い、利根川輸送を担っていた高瀬舟から小舟役銀を徴収したが、高瀬舟は上総の魚を江戸に輸送するのにも使用されており、魚河岸の問屋がこの役銭を負担したこともあるという[63]。一般の町人が被った生活上の不便に加え、魚問屋は財政的な負担を強いられていた。

團十郎と贔屓連の関係が最もよくわかるのは『助六』においてである。市川團十郎家が助六劇[64]を演じる際には、魚河岸からは紫の鉢巻、吉原から下駄、蔵前から傘が贈られ、旦那衆が河東節を唄うのが慣例となった[65]。多くの江戸根生の町人は團十郎が演じる助六に自己の理想を投影した。将軍のおひざ元に暮らし、圧倒的な経済力を背景に独自

の文化を開花させた江戸っ子は武家社会の中で不満を抱えながら、武士や「田舎者」に対して強い優越意識を持っていた。それは支配階層や圧倒的な数で江戸に流入してくる地方出身者に対する反発と数的マイノリティとしての危機感の裏返しに違いない。「助六」や團十郎の芝居を通じて、また團十郎を贔屓にすることで、江戸っ子は不満を発散させ、自分たちの文化的優位性を天下に知らしめようとしたのである。

そこで彼らが成田不動を信仰した理由を検証してみたい。

六、火事と疫病

「火事と喧嘩は江戸の花」と言われるほど江戸は頻繁に火災に見舞われ、度々甚大な被害を出す大火となった。住民はそのたびに家を焼かれ、移動を余儀なくされた。江戸の火災を拡大させたものは、町人地の人口過密であった。江戸開府以来、江戸城築造のための市街地造成のために大名屋敷や旗本・御家人の集住が行われ、町屋や神社などが移転させられた。神田明神など大手門前にあった寺社も移転を余儀なくされている。この結果、町屋は日本橋、京橋、神田、麹町、桜田、八丁堀などに集中するようになった。

天正十八年（一五九〇）から明暦の大火（一六五七）までの六十七年間に記録に残るだけでも江戸では百四十件もの火災が発生しており、当然、神田・日本橋地区（以後「日本橋地区」）も同等件数の火災の被害にあっていたと推定される。中村座や市村座のあった堺町、葺屋町界隈は特に火事の被害の頻度が高く、明暦の大火以降、天保五年（一八三四）までの一七八年間に三十一回全焼、中村座、市村座は三十三回焼失している。[66] 隣接する伝馬町、小網町、瀬戸物町、小田原町などもほぼ同じほど焼失した。[67] いずれも旅宿運営に関わった講中の集住地域である。

頻繁かつ大規模な火災の原因は、建物の密集という要素以外にも、冬季には降雨が少なく空気が乾燥し、かつ風が北西から日本橋のある南東に向かって吹き下ろすという自然条件にあった。明暦の大火の前には、八十日以上も降雨がなかった。歌舞伎では、火を嫌って現在でもなお「千秋楽」を「千穐楽」と表記し、「火」の文字を避けている。しかし、どれほど細心の注意を払っても火災が延焼しやすいという地理的条件は変えようがないものであった。

この日本橋地区は本来、将門を祭神とする神田明神の氏子である。しかし、その江戸最強の御霊も火事を防いではくれなかった。そこに登場したのが、将門調伏の縁起を持つ成田不動だったのである。不動明王は火炎を操り、倶利伽羅は水を操る。初代の演じた『成田山分身不動』は成田不動と倶利伽羅が同一尊格であることを明確に示していた。だからこそ日本橋地区の特権商人は成田不動の霊験に地域の火防を委ねるために、分霊である旅宿を自らの居住地域に設置したのではなかったか。西山松之助によれば、元禄から幕末までに江戸では八十六件の不動の開帳があった。宝永の開帳時には霊験を限定しなかった不動岡惣願寺の不動尊が、宝暦二年には火防不動として登場していることからも江戸では不動が火防と結びつき、また人を呼べるものであったことが伺える。[68]

明暦の大火後、幕府は大名、旗本に、享保には町方に火消の組織の創設を命じた。旗本下に置かれた火消組織は定火消と呼ばれ、そのうちの火消人足である臥煙は全身に刺青を施し、下帯のみで消火活動にあたることで有名だった。江戸期の消火活動は建物を破壊することで延焼を食い止めるというものである。そのために多くの鳶が町火消として臥煙同様の活躍をした。鳶もまた旅宿運営に関わった講中の中核をなす職業集団である。

町火消の家に生まれた加藤金蔵は以下の様に述べている。

江戸の町火消は、江戸ッ子気質の生粋なものと云はれ、（中略）身體一面水びたしで、刺子は勿論下襦袢までズブ濡れで、追々寒風に吹かれ、其れがバリ〳〵に凍結して、丁度九段坂の牛ヶ淵に来た時には、頭巾の垂れが凍りついて、一寸先が見えず、それをあげる勇気も無きまで、身體が極度に疲労して漸く午前六時に帰宅した。其時が消防に入つて一番苦しかつた。そして消防は火よりも水に苦しむと云つた。[69]

火消にとっては火だけでなく、水からも身を守ることが必要だった。だとすれば、不動明王＝倶利伽羅はまさに最良の守り神であったろう。火消が消火活動に用いるポンプも「竜吐水」「繁龍水」「雲龍水」「生龍水」など竜にまつわる名で呼ばれていた。

江戸では火元になる可能性を減らすために一般家庭や商家には風呂を置かないのが普通であった。そのため火消の倶利伽羅の刺青は、火事場のみならず湯屋でも日常的に人々の目にさらされた。その結果、刺青は火消以外の人たちにも流行し、「倶利伽羅紋々」が刺青を指す俗語として広く用いられるほど、倶利伽羅は一般的な絵柄となったのである。

さらに、元禄十六年（一七〇三）の出開帳の三年前に成立した『成田山新勝寺本尊来由記』[70]は、本尊の由来と共にその霊験を以下のように説く。

抑当尊者神用無方而霊験最夥、或抜女人産生之苦、或救海士漂堕之難、若頂戴此尊所持宝劔狂乱失心者立治、風湿病患類速癒、如此神効不遑枚挙、但除信心浅薄者耳

同様の記述は文化十二年（一八一五）の『成田山略縁起』にも登場する。二代目の時代にはすでに中村座で狐つきの女を治した話や天満の茶屋で若い娘の病を治した話などが登場している。團十郎を巡る霊験は主として病気治癒であるが、トルコへ漂流した船頭が團十郎の『暫』の絵を本尊として拝んだところ帰国できた話などもあり、成田不動の霊験と重なる。また現在でも團十郎や海老蔵が口上では、「にらみ」を行い、無病息災のためだと説明を加えている。

疱瘡、インフルエンザ、麻疹、梅毒、赤痢、腸チフス、水痘、後にはコレラが度々全国で流行したが、人口が過密の江戸においては伝染病の拡大は避けがたく、被害は甚大であった。麻疹とコレラの流行が重なった文久二年（一八六二）の六月から八月にかけては江戸市中で

の死者は二万人を超えたという。内藤記念くすり博物館所蔵の「麻疹を軽くする伝」と題された文久二年の浮世絵（図1）は、三升紋を付けた着物の團十郎と思しき人物が麻疹除けのまじないで盥を子供の頭にかぶせる姿が描かれている。八代目は嘉永七年（一八五四）、七代目は安政六年（一八五九）にすでに没しており、明治七年（一八七四）に九代目が襲名するまでは「團十郎」を名乗る役者は不在であった。文久二年に「市川團十郎」を名乗る役者はいない。それでもなお、「團十郎」は病封じの力を期待されていたのである。

図1　「麻疹を軽くする伝」[71]

人々は疾病に対しても神仏を頼りとした。疫病の被害は患者の出現だけにとどまらず、鈴木則子によれば、例えば麻疹の流行では、入浴、月代、房事、音曲、酒、特定の魚類などが病後に避けるべきものとして禁忌扱いされたために芝居小屋、風呂屋、床屋、遊郭、酒屋、魚屋などが経済的被害を蒙った[72]。疱瘡、インフルエンザ、コレラなどでも同様の被害が生じた。従って、團十郎の支援者であり、旅宿の運営に関わった講中のうち、俳優、花柳界、魚河岸は火事のみならず、疫病によっても多大な経済的損失を被ったのである。そして疫病封じもまた、成田不動、倶利伽羅の利益であった。

終わりに

日常生活の中では、地域共同体としての信仰を作り出すほどの生活上の共通点を持たない江戸の人々にとって、火防と疫病封じは身分や職業上の違いを乗り越えた共通の願いであった。

火災と疫病を防ぎたいという思いが、火災の多発地帯である日本橋地区の異業種の人々を成田不動に結びつけた。彼らは成田不動の霊験を囲い込むために、その分霊である旅宿を自らの活動地域に置き、さらに團十郎に芝居の中でも生身の不動になることを望んだのである。『成田山分身不動』で初代は成田不動に「扮した」が、二代目以降、その眼力だけで成田不動の霊験を表すようになった。つまり、團十郎は成田不動に「なった」のである。しかし、團十郎の側から見れば、「なった」というより、成田不動になることを強いられたと言うべきなのかもしれない。しかし、歴代團十郎は江戸の成田不動信仰の中心にいる限り、江戸の中核商人の確固たる支援を得ることができたのである。初代が人気の衰えに怯えていたのに比べれば、贔屓が團十郎を成田不動の申し子と崇め、「江戸っ子」の代表とみなし、一丸となって支える状態はまさに成田不動がもたらした利益以外の何物でもなかった。「江戸っ子」は、成田不動である團十郎を支え、助六である團十郎を盛り立てた。その團十郎を通じて外に提示される江戸っ子の文化は人々を魅了し、江戸末期には下層町民までもが「江戸っ子」を標ぼうするようになり、團十郎に対する思いも広く共有されるようにな

ったのである。

明治二十年（一八八七）の新聞に掲載された記事に、「市川團十郎」という名跡は江戸の町人が育んだものであるとの心情が凝縮されている。

市川團十郎なる名前は藝名にして而かも江戸八百八町の愛顧により雷轟するに至りたる名なれば余の如き東京人は頗る論議するの権を有す即ち市川團十郎なる名蹟は天下の共有物にして堀越秀の私有にはあらざる可きなり[73]

成田山新勝寺の出開帳に端を発した江戸町人の成田不動信仰は、旅宿の設置と團十郎の存在によって江戸に定着した。しかし、ここで見られた信仰は、もともとは江戸という消費経済に支えられた、その中でも日本橋地区の「江戸っ子」と呼ばれる商人という極めて限定的な人々を中心とするものであった。通常は五穀豊穣と関連している水神を火防に用いたところに江戸の成田不動信仰の特殊性がある。彼らは成田不動を自らの祈願内容に合致させ、強化させる装置として旅宿と團十郎を利用することで、信仰を普遍化させ、江戸に定着させたのである。

〔注〕

（1）小倉博「成田山新勝寺の江戸出開帳について」『法談』四十四号　成田山新勝寺法談会　一九九九年

（2）原淳一郎「近世名所寺院の経営と宣伝活動―成田山新勝寺における江戸庶民との接点」『千葉史学』千葉歴史学会　一九九九年

（3）西山松之助『市川団十郎』吉川弘文館　一九七三年、「市川団十郎の成立」『演劇評論』演劇評論社　一九五五年三月

（4）旭寿山『成田不動霊験記：市川団十郎と名優たち』成田山選書　一九八一年

（5）木村涼「成田山新勝寺における奉納芝居の一考察」『法政大学大学院紀要』五五　法政大学大学院　二〇〇五年、「成田山新勝寺における勧進興行の一考察」『千葉史学』四九　千葉歴史学会　二〇〇六年、「七代目市川団十郎と成田山新勝寺の江戸出開帳」『芸能史研究』芸能史研究会　二〇〇七年など。

（6）西山松之助『江戸町人の研究』第二巻　吉川弘文館　一九七三年

（7）湯浅隆「『近世的開帳の成立と幕府のその政策意図について』」『史観』第九〇冊　早稲田大学史学会編　一九七五年一月

（8）北村行遠「江戸の信仰空間：出開帳寺社の開催場所の変遷をめぐって」『立正大学文学部論叢』九八　立正大学　一九九三年

（9）金山正好「江戸の開帳」『武蔵野』四十九巻三、四武蔵野文化協会　一九七〇年

（10）比留間尚「江戸の開帳」『江戸町人の研究』第二巻

（11）海原亮「嵯峨清涼寺釈尊の江戸出開帳と住友」『住友史料館報』住友史料館　二〇〇五年、「文化七年清涼寺出開帳の諸経費」『住友史料館報』二〇〇七年、塚本俊孝「嵯峨釈迦仏の江戸出開帳」『仏教文化研究』浄土宗教学院　一九五八年、中村直勝「寺社の出開帳―嵯峨釈迦堂の場合」『日本美術工芸』四五一―四五二　一九七六年一九七六年、

（12）鷹司誓玉「善光寺の江戸開帳について」『佛教大学研究紀要』　一九六三年、小林計一郎「近世善光寺の出開帳」『日本歴史』三七〇　吉川弘文館　一九七九年、湯浅隆「江戸における開帳場の構成―享和三年善光寺出開帳の事例を中心として」『国立歴史民俗博物館研究報告』11　国立歴史民俗博物館　一九八六年

（13）望月真澄「江戸城大奥女性の法華信仰―身延山久遠寺の江戸出開帳を中心に」『大崎学報』146　立正大学仏教学会　一九八九年、池浦泰

憲「越前高田における身延山出開帳の一考察」『日蓮仏教研究』常円寺日蓮仏教研究所　二〇〇八年

(14) 高木豊「日蓮宗の開帳と縁起」『大崎学報』一一三、一一四　立正大学仏教学会　一九六一年

(15) 中山幹雄編『市川團十郎研究文献集成』高文堂出版社　二〇〇二年

(16) 『勧進帳』については、河竹登志夫「勧進帳―その成立と芸術」『前進座文庫』前進座、一九七三年、西山松之助「七代目団十郎の弁慶と今日」『演劇界』演劇出版社、一九七五年など。『助六』については、浅野三平「『助六』の実説について」『女子大国文』京都女子大学国文学会　一九六五年、高橋理「浮世絵と見る歌舞伎『助六』の変遷」『文化学研究』日本女子大学文化学研究会　二〇〇九年、塩見誠一「助六狂言成立考」『文化史研究』六　一九五七年など。

(17) 宮田登『江戸のはやり神』ちくま学芸文庫　筑摩書房　一九九三年

(18) 湯浅隆「近世開帳の成立と幕府のその政策意図について」『史観』早稲田大学史学会遍　一九七五年一月、西山松之助『江戸町人の研究』第二巻

(19) 『御触書寛保集成』二一　寺社之部一一八四、司法省大臣官房庶務課編『徳川禁令考』前集五、二五九〇、創文社　一九五九年

(20) 平山敏治郎「縁日と開帳」『日本民俗学会報』一四　日本民俗学会　一九五五年

(21) 万寿亭正二『江戸神仏願懸重宝記』国書刊行会　一九八七年

(22) 斎藤月岑『東都歳時記』（『続日本随筆大成』別巻十一）　吉川弘文館　一九八三年

(23) 『甲子夜話』

(24) 林屋辰三郎『化政文化の研究』岩波書店　一九七六年

(25) 『成田山新勝寺史料集成』第五巻　大本山成田山新勝寺　一九九八年

(26) 長谷川強校注『元禄世間咄風聞集』岩波書店一九九四年

(27) 酒々井宿石標の裏面に「元禄元年起立丸下講」の文字があり、本堂大天蓋の銘にも「元禄元戊年起立之講」の文字が確認できることから、元禄元年（一六八八）には江戸最初の成田不動講とされる丸下講がすでに活動していたことがわかるが集客力はなかったと考えられる。

(28) 村上重良『成田不動の歴史』東通社出版部　一九六八年

(29) 鶴岡静夫「将門の乱と仏教」『武蔵野』武蔵野文化協会　一九六〇年

(30) 鶴岡　前掲論文

(31) 伊原敏郎『歌舞伎年表　第一巻』岩波書店　一九五六年。

(32) 比留間、前掲論文

(33) 西原柳雨　『川柳江戸歌舞伎』春陽堂　一九二五年

(34) 比留間、前掲論文の「開帳と歌舞伎上演」の表に『歌舞伎年表』の上演記録を加えたもの。

(35) 服部幸雄『市川團十郎代々』講談社　二〇〇二年

(36) 『野郎役者風流鏡』（『歌舞伎評判記集成』第一巻　岩波書店　一九七二）

(37) 伊原敏郎「元祖團十郎の懺悔録」『團十郎の芝居』早稲田大学出版部　一九三四年、加賀佳子「初代団十郎の願文」『早稲田大学演劇研究』一九九三年には全文の翻刻を掲載。以下、引用はすべてこの翻刻による。

(38) 上記九年の願文に記される「大小不動」もまた大山不動のことである。

(39) 「兵根元曽我」『元禄歌舞伎傑作集　上巻　江戸之部』早稲田大学出版部　一九二五年

(40) 立川焉馬、伊原敏郎はこれを元禄十年の奉納としているが、旭寿山は神鏡の奉納は元禄十六年であった可能性があるとしている。『成田山新勝寺史料集』第五巻の「元禄十六年江戸開帳寄進帳」には市川團十郎九蔵父子の奉納品として「団鏡一面」とある。

(41) 『歌舞伎評判記集成』第二期第六巻　岩波書店　一九八九年

(42) 『歌舞伎事始』（『古典日本文学全集』第三十六　筑波書房　一九六七年）

(43) 高谷重夫『雨乞習俗の研究』法政大学出版局　一九八二年

(44) いずれも『大正新脩大蔵経』第二十一巻　順に一一九九、一二〇〇、

一二〇二、一二〇五、一二〇八　大蔵出版株式会社　一九二八年
(45)『大正新脩大蔵経』第十八巻　一二〇六　大蔵出版株式会社　一九二八年
(46)『大正新脩大蔵経』第十八巻　一二〇七
(47)『大正新脩大蔵経』第七十八巻　二四六八　大蔵出版株式会社　一九二八年
(48)『近世佛教集説』國書刊行会　一九一六年
(49)赤松宗旦『利根川図志』　名著刊行会　一九六七年
(50)川村邦光「不動明王と修験道」『不動信仰事典』戎光祥出版株式会社　二〇〇六年
(51)『成田山新勝寺史料集』第一巻
(52)『成田山新勝寺史料集』第五巻
(53)国立博物館蔵『伊達模様解脱絹川』
(54)高田衛『新編江戸の悪霊祓い師』　筑摩書房　一九九四
(55)加賀佳子「『団十郎全快』かわら版の刊行時期」『芸能史研究』芸能史研究会一二四　一九九四年
(56)『新修成田山史』大本堂建立記念開帳奉修事務局　一九六八年
(57)同書
(58)『新修成田山史』
(59)魚河岸百年編纂委員会『魚河岸百年』株式会社日刊食料新聞社　一九六八年
(60)寺門静軒『江戸繁盛記』の注　（『新日本古典文学大系』一〇〇　岩波書店　一九八九年
(61)山東京伝『通言総籬』（『新日本古典文学大系八五』岩波書店　一九九〇年
(62)西山松之助『江戸っ子』
(63)同書
(64)助六を題材とする狂言は、正徳三年（一七一三）の『花館愛護櫻』から始まり、明治六年（一八七三）の『助六所縁八重櫻』に至るまで十五作ある。
(65)馬場文耕『武蔵野俗談』、大田南畝『一話一言』による。市川宗家のみが河東節を使うようになってからは魚河岸が上演許可のしるしとして江戸紫の鉢巻を贈るようになったという。
(66)西山松之助「火災都市江戸の実体」『江戸町人の研究』第五巻　吉川弘文館　二〇〇六年
(67)西山松之助「江戸町人総論」『江戸町人の研究』第一巻　吉川弘文館　一九七二年
(68)西山松之助「近世江戸の不動信仰」『不動信仰事典』
(69)加藤金蔵「江戸の消防について」『武蔵野』第十六巻第十六号　一九三〇年
(70)『成田山新勝寺史料集成』第一巻
(71)着物に三升の紋があることと目が大きく描かれた特徴的な風貌から盥を持つ人物は七代目市川團十郎をモデルにしたものと判断する。
(72)鈴木則子『江戸の流行り病』吉川弘文館　二〇一二年
(73)『読売新聞』明治二十年（一八八七）二月十三日

（みやち　まり　文学研究科仏教文化専攻修士課程修了）
（指導教員：斎藤　英喜　教授）
二〇一四年九月三十日受理